

「深い学び」へと導く指導についての一考察 —「学び合う学び」の理念を新学習指導要領実施に生かすために—

後藤 孝文

岐阜聖徳学園大学教育学部非常勤講師

A study on lessons which led students to deep learning:
Utilizing the theory of “Learning the ways of learning from each other” for
planning lessons for the new proposed course of study

Takafumi GOTOU

キーワード：学び合う学び 学びの共同体 対話的な学び 深い学び

I. 研究のねらい

「分かった！」と子どもが目を輝かせる授業。教師の誰もが追求する姿であるが、それは、教師主導の一斉授業ではなく、子どもが主体となって学び合う授業から生まれるものではないだろうか。

筆者が勤務したA県K市では、昭和55年より一部の小学校ではあるが、子どもが主体となる授業を目指し、奈良女子大学附属小学校の「学び合う学習」¹⁾を参考に研究に取り組んでいた。その後、この研究をベースに生徒指導困難校であったK市立O中学校は、「学びの共同体」の理念（この理念は学び合うことを学ぶことから「学び合う学び」¹⁾と以下表記する）を柱に学校改革に取り組み、落ち着いた学校運営を取り戻したことで注目を浴びた。これを機に、K市教育委員会は平成19年より学校教育の基本方針の一つとして「学び合う学び」を掲げ、現在も全市で取り組んでいる。

筆者は、平成19年より7年間、K市立K小学校並びにA中学校の校長として「学び合う学び」による授業改善と学校改革に取り組み、退職後も授業アドバイザーとしてK市内の多くの授業を参観し助言してきた。これまで、小中学校が連携して同じ指導法に基づいた授業をすることにより、子ども同士が温かくつながり合える等、9年間の子どもの成長は確かなものとなってきている。また、教師にとっては、転勤しても市内であれば共通した指導法であるため、戸惑うことなく指導ができるという強みも大きい。しかし一方で、若手教員が増えたこともあり、子どもが主体と言いながら一向に教師主導から抜け出せない、あるいは、子どもの発言に委ねるあまり学びに深まりが見られない、などの課題が見られる。つまり、「学び合う学び」により一定の成果は得られているが、高みを目指すと壁にぶつかり、長年にわたりこの壁が乗り越えられない状況が続いていることを実感する。

折しも新学習指導要領が告示され、その中で資質・能力の育成に向けた授業改善のキーワードである「主体的・対話的で深い学び」は、「学び合う学び」が目指している理念と共通する点が多い。

そこで、K市が取り組んできた「学び合う学び」が直面する超えられない壁とは何かをアンケート調査から明らかにし、校内授業研究会でのベテラン教師の授業実践を分析することから、その克服への方策を探ることを研究のねらいとした。それは同時に、新学習指導要領を確実に実施する手がかりとなると考えた。

II. 研究の方法

1. 新学習指導要領のねらいと「学び合う学び」とのつながりや整合性を整理する。
2. K市内の教員を対象にアンケート調査を実施し、「学び合う学び」による授業実践を通して感じている良さや難しさを明らかにする。
3. ベテラン教師による「学び合う学び」の授業から、指導の難しさや越えられない壁を克服するヒン

トや方策を、授業後の研究協議会での議論を通して考察する。
4. 研究の成果と今後の課題をまとめる。

Ⅲ 研究の内容

1. 新学習指導要領が求めているものと「学び合う学び」との結びつきについて

(1) 新学習指導要領が求めているもの

改定の基本方針²⁾の一つは、子どもたちが将来迎えるますます予測の困難な時代に備え、「生きる力」をより具体化し、育成を目指す資質・能力が明確にされたことである。それは、次の3点である。

- ① 生きて働く「知識・技能」の習得
- ② 未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成
- ③ 学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養

この目指す資質・能力を育むために、6つの留意点が述べられているが、中でも重要と考えるのは、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の視点での授業改善と質の向上であり、次のように解説されている。

「主体的な学び」とは、学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次に繋げる主体的な学び。

「対話的な学び」とは、子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えることができる等を通じ、自己の考えを広げ深める対話的な学び。

「深い学び」とは、習得・活用・探求の見通しの中で、教科等の特質に応じた見方や考え方を働かせて思考・判断・表現し、学習内容の深い学びにつなげる学び。

(2) 「学び合う学び」の実際の取り組み

「学び合う学び」とは、佐藤学³⁾により「一人残らず子どもの学ぶ権利を保障し、その学びの質を高めること」と提唱されている。その実現に向けての第一は、協同的学びは、学びの本質であること。第二は、一人残らず子どもの学びの権利を実現するには、協同的学びしかないこと。第三は、4人以下の小グループの協同的学びが、学力の低い子どもの学力を回復する機能を発揮すること。第四は、協同的学びが、学力の高い子どもにもより高い学力を保障することである。

目に見える形としては、教室をコの字の机の並びにすることと、グループでの学びでは男女4人がたすき掛けに座ることだけである。重要なことは、この4人グループの学びが学習の中心をなし、互いの考えを聴き合い、尋ね合い、高め合うことである。グループ内の考えを一つにまとめるのではなく、互いに考えを擦り合わせ、自分の考えを補強し、分からなければ尋ねればよいのである。全体学習は、机の並びをコの字にして、一人一人の考えを聴き合い、深め合う場となる。大切なことは、学びからだれも一人ぼっちにせず、聴き合う関係づくりをもとに課題に対し協同で探究することである。

実際の授業では、右のような流れを基本にしている。教師は、子どもと子どもの考えをつないだり、テキストにもどしたりしながら課題に迫るようコーディネート役となる。また、学びから落ちそうな子どものケアにあたることも大切である。導入に続く<共有の学び>では、誰もが理解できる課題に取り組む。そして、これを足がかりに<ジャンプの学び>では、一人では解けないやや難しい課題に取り組むことで、仲間との協同的な学びが発揮され、夢中になって課題に取り組む場としている。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">① 導入<ul style="list-style-type: none">○ 魅力的な課題の提示② <共有の学び> だれもが理解すべき課題<ul style="list-style-type: none">○ グループの学び<ul style="list-style-type: none">・ 教科書レベル、基礎・基本（低学力層の底上げ）③ <ジャンプの学び> 共有の学びを基礎に挑戦する課題<ul style="list-style-type: none">○ グループの学び<ul style="list-style-type: none">・ 応用、発展的な課題（中位・高位層の底上げ）・ 一人では解けない。難しいから面白い、夢中になる④ 振り返り<ul style="list-style-type: none">○ 何を学んだか |
|---|

図1 「学び合う学び」の授業の基本的な流れ

(3) 新学習指導要領と「学び合う学び」のつながり

(1) より、新学習指導要領の目指す資質・能力を育成するためには、「主体的・対話的で深い学び」

の視点で授業改善を進めることが最も重要であり、今回の改定の肝と言ってもよい。中でも、「対話的な学び」の解説に「子ども同士の協働」「自己の考えを広げ深める」とあるが、これこそが「学び合う学び」の取り組みの主体であり、深い学びへとつながる重要なキーワードとなっている。

(2)の「学び合う学び」を要約すれば、学びの質と平等を同時に追求することである。それは、単なる授業法にとどまらず、他者を尊び、協同して生きる力を育て、将来にわたって学び続ける上で必要な創造的な思考力や探究心などの基礎を育てるというヴィジョンを表している。

よって、新学習指導要領の目指すものと「学び合う学び」の理念は、共通するものが多く、「学び合う学び」による授業改善は、そのまま新学習指導要領の実施をより確かなものにすると考えられる。

2. アンケート調査を基にした学校現場の現状と課題

「学び合う学び」の取り組みについて、教師へのアンケート調査をもとに現状と課題を探った。

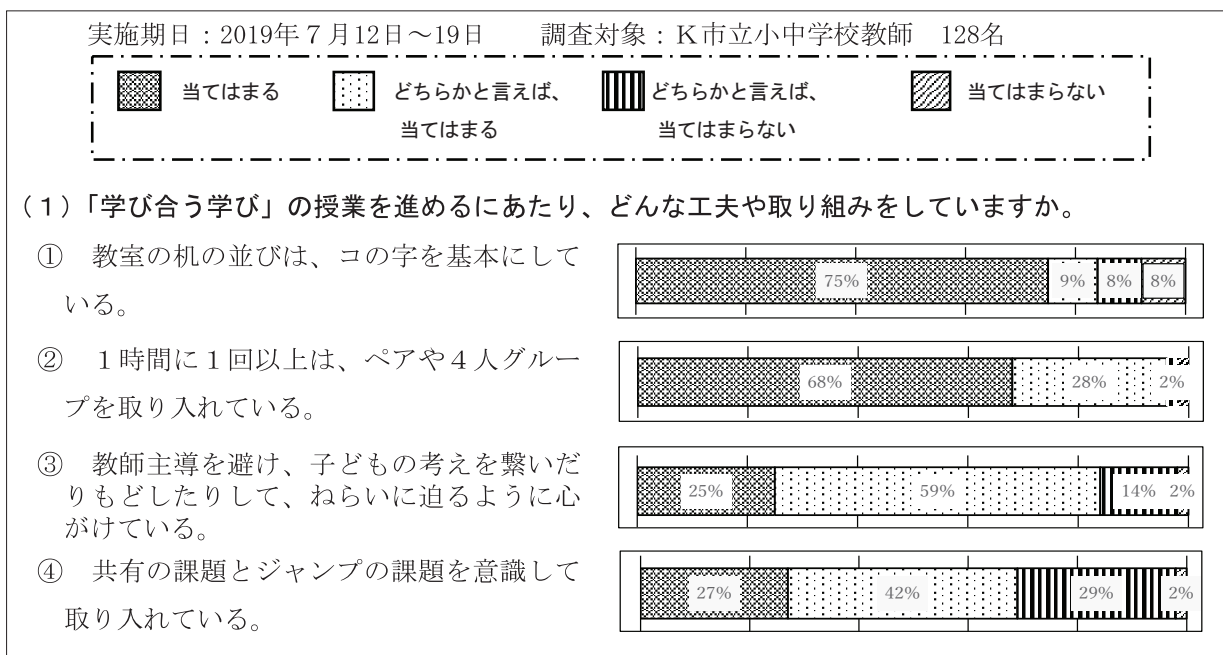


図2 授業を進めるにあたっての工夫や取り組み

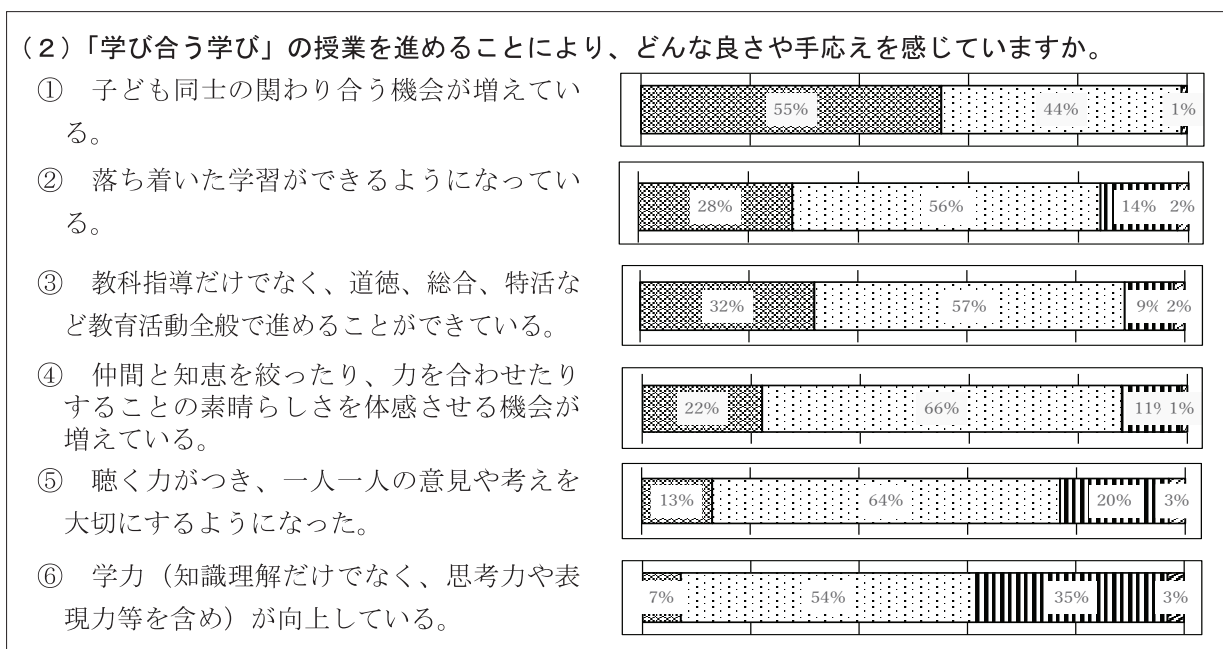


図3 「学び合う学び」の授業のよさや手応え

(3) 「学び合う学び」を取り入れた授業では、どのような点が難しいと感じていますか。

- ① いかにか意欲的に主体的に取り組ませるか。
- ② どこまで教え込み、どこまで子どもに委ねるかの判断で迷う。
- ③ ペアやグループ学習をどのタイミングで行なわせるとよいか難しい。
- ④ グループ学習が意見発表で終わりがちで、気づきや深まりのある学びに至らない。
- ⑤ グループ学習の良い学びが、全体への学びにうまく広げられない。
- ⑥ 子どもの発言を大切にすると、本時で押さえない内容に気付かせるまでに時間がかかる。
- ⑦ 子どもの発言をとらえ、タイミングよくねらいに迫る発問や足場かけをするのが難しい。
- ⑧ ジャンプの課題をどんな課題にすればよいか難しい。

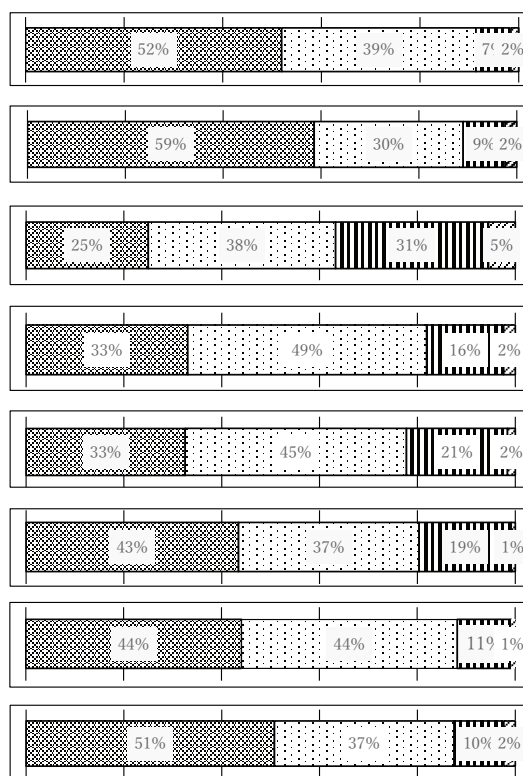


図4 「学び合う学び」の授業の難しさ

(4) アンケート調査の考察

(1) の①②より、机をコの字にしたりペアや4人グループを取り入れたりする授業が、すっかり定着していることが分かる。また、③からは、84%の教師が教師主導ではなく子どもの考えを繋いだり戻したりしながら授業を進めるよう心がけている様子が見られる。④の共有の課題とジャンプの課題を意識して取り入れているかの質問に否定的な回答が31%あるのは、(3)の⑧のジャンプの課題をどんな課題にすればよいか難しいと感じていることと関連するものと思われる。(図2、図3、図4)

(2) の①から④より、「学び合う学び」を取り入れた授業の良さや手応えを84%以上の教師が肯定的に捉えている。①②から、子ども同士の関わる機会が増え、落ち着いた学習ができていたり、③④より、仲間と知恵を絞ったり力を合わせたりすることの素晴らしさを教育活動全般で体感させていることが分かる。しかし、⑤の聴く力については、肯定的な回答は77%あるが、聴く力は育ちつつも仲間の考えを十分に生かすまでには至っていないと感じている教師がやや多いことが分かる。また、⑥の学力については、肯定的な回答が61%にとどまっており、手応えは感じつつも学力テストのように、目に見える形での力がついたとまでは感じることができないということであろう。今後の課題であるが、「学び合う学び」の授業の充実が図られれば向上するものと考えられる。(図3)

(3) の「学び合う学び」を取り入れた授業の難しさについては、どの質問に対しても難しいと感じているようだ。中でも、①のいかにか主体的に取り組ませるか、②のどこまで教え込み、どこまで子どもに委ねるか、⑥の気付かせるまでに時間がかかる、⑦のタイミングよく発問や足場かけをするのが難しい、の回答が多かった。これは、「学び合う学び」の授業を進める上で、教師が授業の中で子どもの表情や言動を瞬時に捉え適切に判断し手を打つことが、いかに難しいかを浮き彫りにしていると言える。また、③④⑤は、グループでの学びを深まりのある学びとするにはどうすべきか、あるいは全体学習への広げ方をどうしたらよいかなど、グループでの学びの難しさを感じている教師が多いことを表している。(図4)

以上をまとめると次のように要約できる。

- i) コの字隊形や小グループの学びは定着しており、子どもの考えをもとに授業を進めている。
- ii) 子ども同士の関わる機会が増え落ち着いた学習が定着しており、教師は手応えを感じている。
- iii) 聴く力や学力の向上については、「学び合う学び」の授業の一層の充実が必要である。
- iv) いかに主体的に取り組みさせるか、どこまで教え込みどこまで子どもに委ねるか、時間がかかること、タイミングよく発問や足場かけをすること、などが授業を進める上で難しい。
- v) グループでの学びを、いかに深まりのある学びとするか、全体学習への広げ方などが難しい。
- vi) ジャンプ課題をどんな課題にすればよいか難しい。

3. ベテラン教師による「学び合う学び」の授業研究より

ベテラン教師による「学び合う学び」の授業を詳細に記録することで、教師の授業にかける思いやねらいに迫る工夫を明らかにした。(資料1)

授業日：令和元年5月23日(木) 指導者：K市立中学校K先生

授業内容：2年国語「枕草子」第一段の授業より(生徒名は仮名)

(資料1)

時間	人物	発言内容
1	教師1	今日はお客様をお連れします。(廊下より清少納言の肖像画を黒板に貼る。)
	生徒	①ウオー!
	教師2	お客様は、だれ?
	生徒	清少納言(一斉に)
	教師3	何時代の人?
	生徒	平安時代(一斉に)
	教師4	(廊下より、もう一枚の絵を黒板に貼る。)
	生徒	①ウオー!すごい!
3	教師5	寝殿造りといわれる館に住んでいた貴族ですね。 清少納言が書いた随筆、枕草子の第一段「春はあけぼの・・・」で始まる文を、②今日はみんなと読み味わいたいです。彼女は一体何を見たり、聞いたりして、どう感じたのかをいろいろ想像してほしい。じゃあ、③想像が膨らむように、お隣同士で読もうね。
4	生徒	ペアで音読し合う。(「をかしい?って、分からん」の声・・・)
8	教師6	一通り順に読んでみましょう。丸読みでいきます。
	生徒	(順に句点で区切って、10人が音読)
10	教師7	④どんなことを言っているの? 隣同士でどうぞ。
12	教師8	「これって、こういうことじゃあないかな」と、細かく考えている人がいてくれてうれしいな。だいたいできたら、⑤すらすら言えなくてもいいよ。みんながつかないでくれるから。
	生徒	(挙手、多数)
	彩乃	景色を表している。理由は、春は明け方、夏は夜、秋は夕暮れ、冬は早朝の景色を表している。
	教師9	⑥理由まで言ってくれたね。正俊は、どう?
	正俊	空気が違って、季節のそれぞれの風景のこと。
	あゆみ	それぞれの季節のよさを言っている。
	教師10	⑦あゆみが、前の二人が言わなかったことを言ったのだけど、気付いた?
	生徒	(ざわざわ、ぼそぼそ)
14	教師11	じゃあ、隣同士で確認して。
	大輔	季節のいいところ。明け方とか時間を表している。
	絵里	正俊は、一つの季節のことを言ったのか、全部について言ったのか・・・。
	教師12	⑧絵里は、何が言いたいのか隣同士で話してみて。
	優輝	・・・。
20	教師13	⑨じっと考えている優輝も素敵だけれど、じっと待っているみんなも素敵。優輝の頭の中には、きっと浮かんでいる絵があると思う。ずっと作品を読んで、読んで、読むと浮かんでくることがあると思う。⑩四季のいいところを言っているよね。じゃあ、どんなところがいいと言っているのか、自分で何回も読んで、絵に書いてもよいし言葉にしてもいいよ。では、書き込みをどうぞ。



2 4	生徒 教師 14	<p>全部は大変なので夏で区切りましょう。 (隣同士から前後でグループになるところも増えてくる。)</p> <p>⑪<u>そろそろグループになりたいよね。</u> はい、ではグループ。 (どのグループも、穏やかによく関わり合っている。)</p> <p>(教師：⑫<u>あまり発言を得意としないあゆみを励ます。</u>)</p>	
3 4	教師 15	<p>コの字の机に戻してもらっていいかな。 ⑬<u>グループでは苦しい、ここがよく分からないというところ、困っているところを教えて？</u></p>	
3 8	由紀	<p>⑭「<u>紫立ちたる</u>」って、どんな感じなのかよくわからない。 <u>春のところ読んでみようか。どんな様子か、思い浮かべながら読んでみよう。</u></p>	
	生徒	美紀、航平、凧沙の3人が音読。	
	教師 17	<p>浮かんできた？浮かんできたことを隣同士で、どうぞ。 (太陽が上がる前のこと・・・等)</p>	
	生徒	⑮ <u>イメージしたことが、みんな違うと思うから、それを聴き合おうね。</u>	
	教師 18	(拳手10名ほど)	
	生徒	時間帯は分からないが、薄暗いことを表現していると思う。	
	教師 19	⑯ <u>どんな言葉から？</u>	
	克也	紫立ちたるという言葉が暗い色なので、薄暗さを表現していると思う。	
	文雄	僕は、早朝の日が昇る前の朝の5時か6時頃を表していると思う。⑰ <u>克也と同じで薄暗さを表現していると思う。</u>	
	教師 20	どの言葉から？	
	文雄	紫立ちたると言う言葉から、⑰ <u>暗いイメージ。</u>	
	美紀	5時か6時といったけれど、⑰ <u>もうちょっと明るい感じだと思うから遅くても5時くらい。</u>	
	凧沙	美紀と同じで、冬とは違うので、まだちょっと寒いかも知れないが、4時か5時の太陽が出かかっている感じで、⑰ <u>微妙な感じの光がパワーッと、出かかっている感じの時間帯だと思います。</u>	
	幸広	時間的には5時頃だけれど⑰ <u>ちょっとずつ太陽が出てくる感じで、紫になる。</u>	
	大吾	僕が思ったのは、みんなの話を聴いてなんですが、山際から太陽が少しずつ出てきて、空の上の方はまだ夜で暗いのですが、下の方は少し明るい感じ、その中間が紫っぽい。それで、⑰ <u>暗いけれど少しずつ光が入ってきて、雲も紫色になるという感じだと思います。</u>	
	ゆかり	大吾と同じで、上の方は暗いけれど下の方は⑰ <u>「少し明かりて」とあるから、わりと明るい感じじゃないのかな。</u>	
	教師 21	明るい、暗い、みんな少しずつイメージが違うね。	
	祐介	「少し明かりて」とあるから、少し明るくなって、まだ、だいたい暗いイメージ。	
	教師 22	どこから、そう思ったの？	
	祐介	初日の出のイメージ。	
	教師 23	薄暗いのか、明るいのか、みんなそれぞれのイメージが違うね。それぞれのイメージを持っているね。⑱ <u>あゆみが、その春のいいところと言った。この人は、どんなところが春のよいところだと思っているの？隣同士でどうぞ。</u>	
	生徒	(隣同士やグループで)	
	教師 24	それぞれのイメージを聴かせて。	
	絵里	紫立ちたる雲のところ、朝日ってとてもきれじゃないですか。美しいじゃないですか。美しい朝から紫立ちたる雲が出てくるって言うのは、とってもきれ、朝日がとてもきれいということ。	

50	航平 教師 25	⑭春自体が季節としてとても美しく、愛おしい感じ。愛おしさがあるのかなと思いました。 (色鉛筆で紫立ちたる雲の様子を描く。そのうまさに一堂「オーッ！」と感嘆の声) 言葉にならないところが一杯あるね。考えたこと、友達から聴いて考えたこと、思ったことをわくわくノートで教えてください。
----	-------------	---

4. ベテラン教師の授業による授業研究から指導のヒントや方策を考察する

参観した教師による研究協議会での意見及び授業記録から、アンケート調査により明らかになった「学び合う学び」の授業における、指導の難しさを克服するヒントや方策を考察する。

(1) いかに主体的に取り組ませるか

- ・ 授業全体を通して、ペアやグループでの学びを多く取り入れることは欠かせない。
- ・ ①の思わず感嘆の声をあげる生徒の様子から、自作掲示物により時代背景とこれから文学を読み味わおうとする雰囲気を一気に作り、興味や関心を見事に引き出している。わずか3分ではあるが、生徒の意欲を高めその後の展開を確かなものにする上で、導入がいかに重要かを示している。
- ・ ②の「今日はみんなと読み味わいたい」という言葉から、枕草子を読んで生徒はどんな情景を思い浮かべるだろうか、どんな考えを出すのだろうかなど、教師のわくわくする思いが溢れている。生徒と共に学びを楽しもうとする姿勢は、授業への心構えとして大切である。
- ・ ③④では、ペアにすることで難解な古文を間違いなく読めるようにし、一人では気付かないことや分からないところに思いを巡らせている。ペアの学びにすることの有効性をよく示している。
- ・ ⑤の「すらすら言えなくてもいいよ。みんながつないでくれるから」という言葉によって、生徒は本当に安心して話そうと思ったに違いない。こんな素敵なアドバイスができるよ。
- ・ ⑨では、答えられずとも一生懸命に考えている生徒と、その間じっと待っている仲間の両者を褒め、その姿勢の大切さをきちんと言葉で伝えている。安心して学べるよう励まし、また、互いの存在や考えを尊重し合うよう、教科の指導を通して仲間づくりにも心を砕いている。
- ・ ⑬のように、分かったことを出させるのではなく、グループで考えても分からなかったことや困っていることを問うている。分からないことを仲間と力を合わせ解けたときの喜びを味わわせることで、主体性や意欲が生まれる。分からないことを学びの起点にして展開するよい例である。

(2) どこまで教え込みどこまで子どもに委ねるか

- ・ ⑭の由紀の疑問について、すぐに他の生徒に尋ねるのではなく、情景が浮かぶように音読させることで本文にもどして全員で考えさせようとしている。生徒の疑問をチャンスにして、テキストや資料にもどすことで手がかりを見つけ、探究させようとする手法は参考になる。
- ・ ⑮の「聴き合おう」という発言から、互いの考えを尊重し理解し合わせることを促している。さらに、⑯では発言がどの言葉からそう思ったのか根拠を求めている。言葉にこだわりつつ、仲間の考えを聴き合うことでより深い学びへと結びつけるための手立てが講じられている。
- ・ 教師の働きとして教え込むことは最小限にし、生徒の発言の違いや疑問をチャンスに、生徒と生徒の考えや資料とをつないだり、資料にもどしたりすることが、学びを深める上で肝要である。

(3) 時間がかかること

- ・ 確かに始めは時間がかかるかも知れないが、授業を通して学び方を学ばせるという意識を教師が常に持つことで、習熟するほどに手際がよくなり時間短縮ができるようになる。

(4) タイミングよく発問や足場かけをすること

- ・ ⑥では理由を言えた生徒を褒め、⑦ではその前に発言した二人との違いに気付かせることで、注意深く発言を聴くことを促している。また、⑧では絵里がどんなことを考えての発言か、その発想の元までみんなで推測しようとしている。わずかな違いや変化も見逃さないよう注意深く生徒を見る姿勢が、タイミングを見逃さないことにつながり、生徒の聴き方の手本にもなっている。
- ・ ⑰の文雄、美紀、凧沙、幸広、大吾、ゆかりの発言は、いずれも前の発言とつながっておりイメージが徐々に膨らんでいる。この一連のつながりが元になって、⑱のタイムリーな足場かけとなる発問が生まれ、⑲の「春自体が愛おしい」と感じるという絵里と、色鉛筆で「紫立ちたる」を表現した航平によりイメージの具体化が一気に図られた。こういったつながりが、生徒にとっても教師にとっても新たな発想を生む元となっている。

- ・ 絵里の⑩「春自体が愛おしい」という注目すべき発言は、グループにしたり音読を入れたりして他の生徒を巻き込んで、さらに読みを深める絶好のチャンスであった。こういった発言を逃さないようにするのが大切である。
- ・ 適切な言葉かけができるようになるためには、深い教材研究と一人一人の生徒の考えの違いやわずかな変化も見逃さない目が必要である。日頃より「子どもが見える」よう注意深く見る目を磨くことしかないのではないか。

(5) グループ学習では、深まりある学びや全体学習への広げ方などが難しい

- ・ ⑩⑪で、個人作業からペア、グループへの移行はスムーズで、時間もたっぷり与えている。⑫のグループでの学びの間、教師は学びにうまく入れない生徒のケアに注意を払っており、余計な口出しはせずに見守っている。その中でグループから聞こえる声を注意深く聴き取ることで、⑬の分かったことではなく、分からないことや困っていることに全体学習の視点を絞っている。
- ・ グループでの学びが深まりのある学びとなる前提として、課題が明確で魅力的なものでなくてはならない。また、4人が自分の考えを出し合うだけではなく、聴き合いとなることが重要で、そのためには「どう思う?」「どうして、そう思ったの?」「くわしく教えて?」などの問い返しの言葉や時間を独り占めにしないなど、スキルとして身につけるべきことを指導することが大切である。

(6) ジャンプの課題をどんな課題にすればよいか難しい

- ・ 今回の授業では、時間不足でジャンプの課題には取り組みなかった。課題はジャンプの課題に限らず、その時々学習状況に応じた、わくわくするような魅力あるものを提示するのは確かに難しい。しかし、生徒の意欲に直結するだけに教師の腕の見せ所でもある。これまでの蓄積や定番といったものを集め、アイデア集として学校や研究会等で検討し活用を図ることが大切である。

IV. 研究の成果と今後の課題

1. 研究の成果

- (1) 新学習指導要領と「学び合う学び」とは、多くの共通点を持っており、「学び合う学び」の授業改善に努めることは、新学習指導要領の実施をより確かなものにすることがわかった。
- (2) アンケート調査より、「学び合う学び」の授業に教師は大きな手応えを感じていることがわかった。同時に、指導が難しいと感じる点や課題を明らかにすることができた。
- (3) ベテラン教師の授業を考察することで、(2)の中で指導が難しいと感じる点や課題を克服するヒントや方策を学ぶことができた。
- (4) このことは、今後の授業や授業研究の中で教師一人一人に必要な「学び合う学び」の充実を図る重要な手がかりとなり、子ども達のより深い学びや学力の向上が期待できる。

2. 今後の課題

- (1) 教師全員が少なくとも年に1回は授業を公開して、教室で起きている事実を元に同僚と学び合う仕組みをつくることは、教師の世代交代の激しいこの時期には特に重要である。個々の生徒のわずかな違いや変化を見逃さない「子どもが見える」教師の目を養うために、研究協議会の持ち方を検討したい。
- (2) グループの学びの質をいかに高めるかの研究は、まだ十分ではない。各教師の様々な工夫とその結果の検証・考察が必要である。(1)と併せて、筆者自身も授業アドバイザーとして、そのための適切な支援の仕方についての研究を深めたい。

注・文献

- 1) 石井順治 (2004年) : 「学び合う学び」が生まれるとき, 世織書房 14-16.
- 2) 文部科学省 (2017年) : 中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説総則編, 東山書房, 1-7.
- 3) 佐藤 学 (2012年) : 学校を改革する, 岩波ブックレット, 15-17, 25-29.